

# 『言語存在論』

野間秀樹 著

東京大学出版会

## 〈言語〉を根源から問い直す原理論

言語はいかに在るのか——これまで問いとして立てられてこなかった視座から、言語を思考する。言語学的な立場を貫きつつも、談話論やテキスト論、文字論などと呼ばれる、既存の言語学とその境界を越え、言語をめぐるさまざまな思考、そして〈知〉のあり方に迫る。

ISBN 978-4130860543 発売日：2018年11月22日 A5判 447頁 本体5,500円 税込5,940円

### ●著者

言語学者。著書に、『ハングルの誕生——音<sup>おん</sup>から文字を創る』（平凡社、アジア・太平洋賞大賞）、『韓国語をいかに学ぶか——日本語話者のために』（平凡社）、『日本語とハングル』（文藝春秋）、『한국어 어휘와 문법의 상관구조』（韓国語 語彙と文法の相関構造。ソウル：太学社。大韓民国学術院優秀学術図書）、編著に『韓国・朝鮮の知を読む』（クオン、パピルス賞）、『韓国語教育論講座』全5巻（くろしお出版）など。大韓民国文化褒章、ハングル学会<sup>チュ・シギョン</sup>周時経学術賞、東京外国語大学大学院教授、ソウル大学校韓国文化研究所特別研究員、国際教養大学客員教授、明治学院大学客員教授を歴任。リュブリアナ国際版画ビエンナーレ、ブラッドフォード国際版画ビエンナーレ、現代日本美術展佳作賞など、美術家としての活動もある。

### はじめに

- 第1章 言語存在論とは何か——言語場へ
- 第2章 言語の存在様式と表現様式
- 第3章 音が意味と〈なる〉とき、  
光が意味と〈なる〉とき
- 第4章 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉
- 第5章 発話論・文論——言語場から
- 第6章 主述論・省略論——言語化すること
- 第7章 真偽論・時制論・命名論  
——言語的対象世界の実践的産出
- 第8章 動態としての言語・動態としての意味

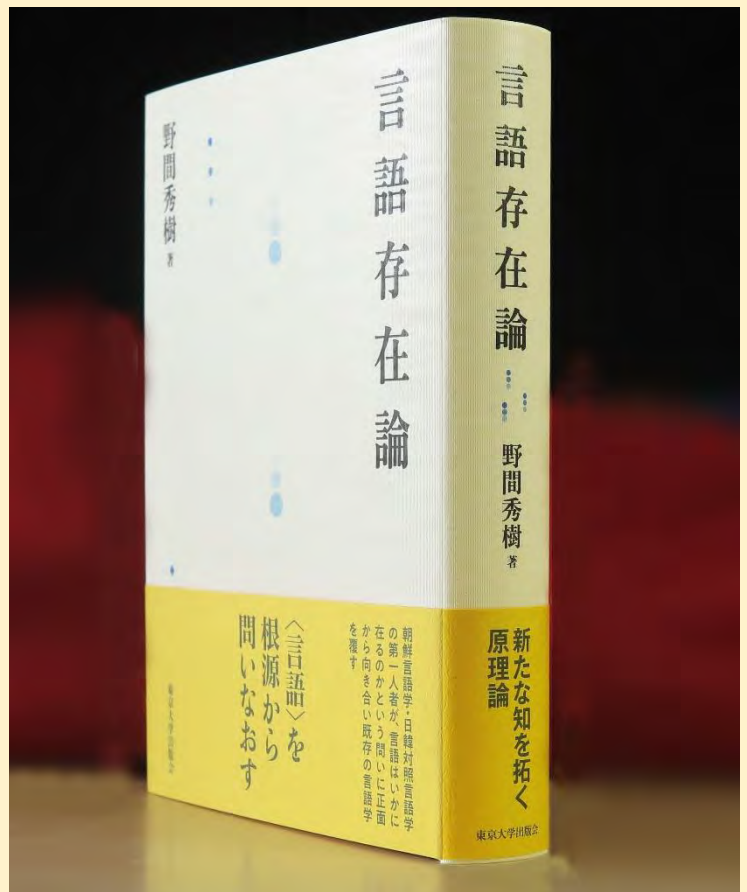
### あとがき

### 参考文献

### 註

### 事項索引

### 人名索引



## 第1章 言語存在論とは何か——言語場へ

- 1 言語存在論と言語の学
- 2 言語場論
- 3 日本語は在るのか? ——「何々語」の内実と輪郭
- 4 言語場と〈文脈〉

## 第2章 言語の存在様式と表現様式

- 1 音と光——言語の存在様式としての〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉
- 2 言語の存在様式と表現様式
- 3 〈話されたことば〉から〈書かれたことば〉へ
- 4 〈書かれたことば〉はいかに生まれるのか——正音エクリチュール革命

## 第3章 音が意味と〈なる〉とき、光が意味と〈なる〉とき

- 1 言語に係わる意味
- 2 〈書かれたことば〉が意味となるとき
- 3 〈話されたことば〉が意味となるとき
- 4 ことばは意味となったり、ならなかったりする
- 5 〈意味が通じる〉ことから出発する虚構の形而上学
- 6 発話者と受話者の〈意味〉はなぜ異なるのか
- 7 〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉の統一という擬制

## 第4章 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉

- 1 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の仕掛け
- 2 オト＝言語として在り、ヒカリ＝文字として在る
- 3 〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の〈時間〉
- 4 〈形音義トライアングル〉の仕掛け
- 5 引用論
- 6 〈話されたことば〉の複数の話し手と複数の聞き手
- 7 〈書かれたことば〉におけるテキストの書き換えと重層的産出
- 8 IT 革命と言語の存在様式、表現様式の変容——新たな言語場
- 9 言語の存在様式と表現様式の区別が言語教育へ突きつけるもの

## 第5章 発話論・文論——言語場から

- 1 言語存在論という問いから言語の内を見る
- 2 談話とテキスト、そして発話
- 3 文とはいかなる単位か
- 4 単語(word)の桎梏、文(sentence)の桎梏
- 5 言語を語る〈文〉の病

## 第6章 主述論・省略論——言語化すること

- 1 〈主語—述語文〉中心主義の桎梏
- 2 言語事実における〈主語文〉と〈非主語文〉、〈述語文〉と〈非述語文〉
- 3 〈省略〉論——言語化されるということ
- 4 ことばが話し手の「意図」や「目的」の結果だという目的論的言語観

## 第7章 真偽論・時制論・命名論——言語的対象世界の実践的産出

- 1 言語外現実——真偽論の陥穽
- 2 〈非文〉と真偽値、〈非文〉と自然さ
- 3 「普通の文」と「普通でない文」は連なった広野に在る
- 4 〈不自然〉を胚胎する言語——意味の二項対立が融解する
- 5 空想も嘘も矛盾も語る言語——言語が描き出すもの
- 6 自らに背理する言語——言語は自らのうちに異質なものを蔵す＝言語の自己背理性
- 7 言語存在論が問う時制論
- 8 命名論——名づけから言語的対象世界の実践的産出へ

## 第8章 動態としての言語・動態としての意味

- 1 〈言語静態観〉の桎梏
- 2 間言語的煩悶——言語の間で動くものたち
- 3 動態としての意味、〈意味同一性〉という物神化
- 4 〈教え＝学ぶ〉言語——言語の本源的な共生性

The Korea Foundation has provided financial assistance  
for the undertaking of this publication project.

Ontology of Language

Hideki NOMA

University of Tokyo Press, 2018

ISBN 978-4-13-086054-3

はじめに

「言語はいかに在るのか?—これが『言語存在論』と名づけたこの書物の問いである。

言語学は、言語がどのような構造を有するのか、あるいは言語がどこで話され、いかに用いられるかといった点にやがて手が消えゆくものとして、これこれの言語が消滅するといったことにも、関心は抱いてきた。いつしか生まれ、読むことのできない、古代の文字群と言語の関わり、そういった形で言語の歴史、失われゆく言語、あるいは今日個々の言語についての構造や生態や変容、それらの系譜的な関わりについての、こうした問いに答えるのは、記述言語学や歴史言語学と呼ばれる分野の、最大の任務である。さらに言語とは何かといった問いも、言語学ではしばしば論じられてきた。かかる問いは、一般言語学などと呼ばれる分野で扱われた。

しかしながら、言語と呼ばれるものが、いかに存在するか、といった問いには、言語学書を繙いても、ほとんど出会うことがない。一つ確認しておくなら、「何々は存在するか、しないか」という形の問いは、真の存在論的問いではない。そうした問いが向かう先は、概ね空虚なところへ飛び交う、遊戯空間である。およそ「存在するものは、存在のありようを何らかの形で常に自らが示している。ゆえに問いは『いかに存在するか』という形で問わ

『言語存在論』



図17 音の世界に実現する〈話されたことば〉と、光の世界に実現する〈書かれたことば〉という2つの存在様式は、座標軸自体を異にする、位相の異なった鏡像関係にある

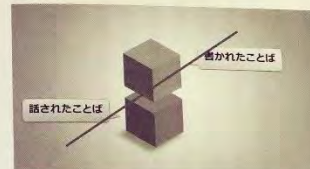


図18 〈書かれたことば〉は〈話されたことば〉の単なる「写し」ではない

とは「話されたことば」を「表記すること」が「唯一の存在理由」であり、「書かれたことば」は「話されたことば」を知るための「写真」に過ぎないものとされた。文字通りの音声至上主義(仏: Phonocentrisme)である。私たちはこうしてきた。現実の言語圏において、果たして「書かれたことば」を、これまでいくつもの形で目の当たりにしてきた。此の創製と複製は「話されたことば」の世界に「書かれたことば」がいかに生まれるのか、そこでは単なる「写し」などでは複製は行われない。巨大な音声が轟くことを見た。

本報では「話されたことば」と「書かれたことば」の存在論的ありようを、さらに開いてゆくことになる。実のところ、「話されたことば」に対して「書かれたことば」は、自立した、存在論的であり、全く異なることばなのだ、言わねばならない。「話されたことば」と「書かれたことば」は、例えばそれぞれを律する、「時間」という決定的な座標軸のありかた自身が、全く異なっている。「話されたことば」からの「写し」であるはずなのに、「書かれたことば」と「書かれたことば」はそれぞれ座標軸がぐにやりに曲がったような、謂わば位相を全く異にする鏡像関係にあると言つてよい(図17、18)。

2 オト「言語音」として在り、ヒカリ「文字」として在る

(1) 音声言語と文字言語、付与される「価値」

この二つの存在様式は、何よりも、音の世界に実現したかたち「言語音」と、「光の世界に実現したかたち」文字という異なったありようによって異なる。媒体としての現象形態それ自身がそもそも物理的に異なる。音は聴覚に依拠し、文字は視覚に依拠するといふ違いがある。ただし、媒体としての音と文字と、それらを知覚する聴覚と視覚という構造は、音「聴覚」、光「視覚」といった具合に常に並行しているというわけではない。文字は視覚的な文字ばかりではなく、例えば点字といった、触覚を通して認識する文字「存在」も存在する。ただ点字もまた、前述のごとく、触覚的でもあり同時に、視覚的な文字で

現する(時間)、それらを支える(構造、そしてそこに潜む(引用)という仕掛けを、まず見ることにする。予め、全体像の概略を図式化しておこう。既存の多くの言語論にあって、「書かれたことば」は「話されたことば」の写しと思われてきた。「話されたことば」を文字に写したものの、あるいは文字によって記号化したものという思考である。第2章第3節(1)でも見たように、ソシュール言語学にあつては、「書かれたこと



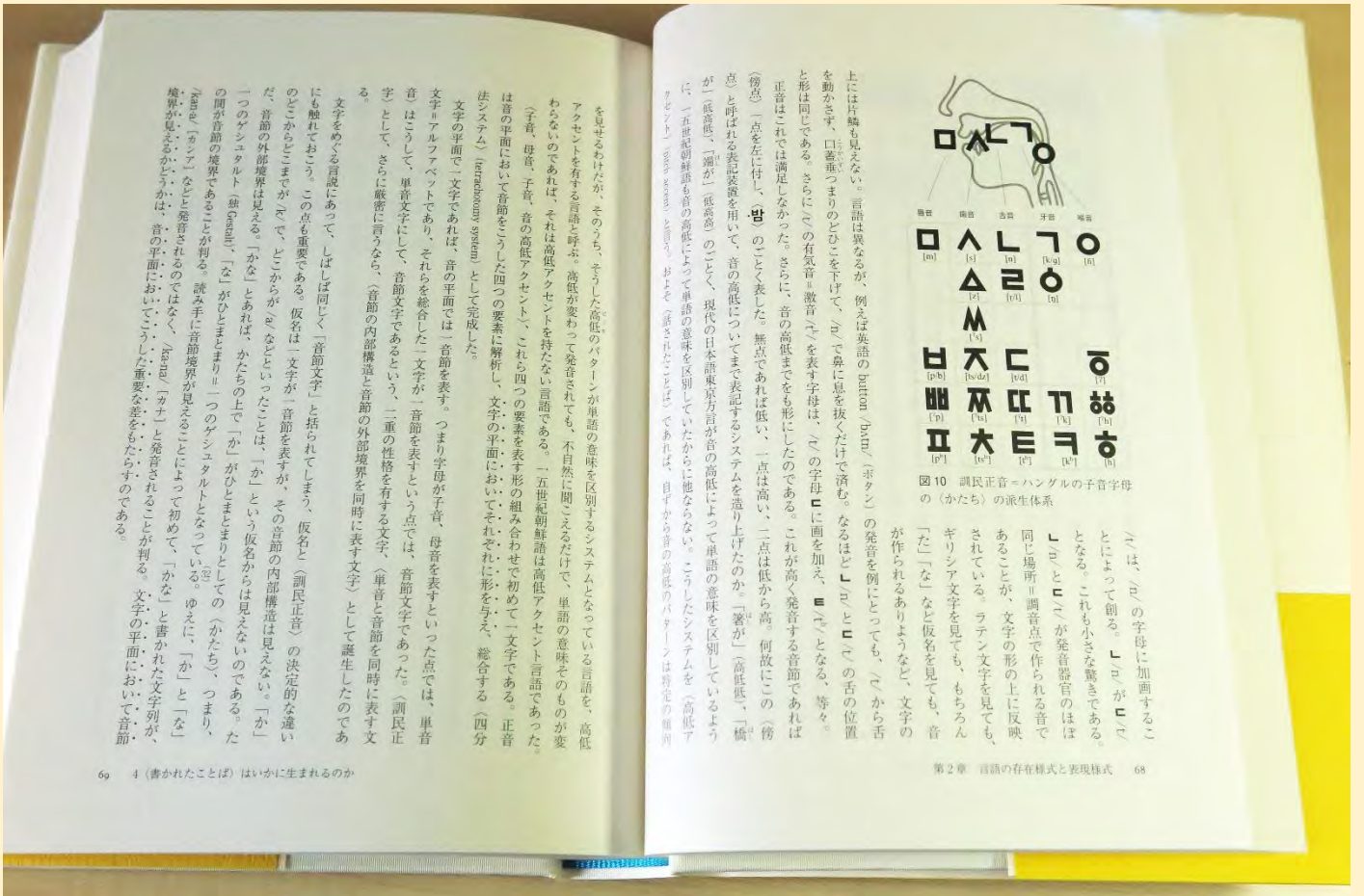


図10 調民正音-ハングルの子音字母の(かたち)の派生体系

をせるのだが、そのうち、さうした高低のバターンが単語の意味を区別するシステムとなっている言語を、高低アクセントを有する言語と呼ぶ。高低が変わって発音されても、不自然に聞こえるだけで、単語の意味そのものが変わらなものであれば、それは高低アクセントを持たない言語である。一五世紀朝鮮語は高低アクセント言語であった(子音、母音、子音、音の高低アクセント、これら四つの要素を表す形の組み合わせで初めて一文字である。正音法システム (phonetic system) として完成した。文字の平面で、文字では、音の平面では、一音節を表す。つまり字母が子音、母音を表すといった点では、単音文字はアルファベットであり、それらを総合した一文字が一音節を表すという点では、音節文字であった。調民正音として、単音文字として、音節文字であるという、二重の性格を有する文字(単音と音節を同時に表す文字)として、さらに厳密に言える。(音節の内部構造と音節の外部境界を同時に表す文字)として誕生したのである。文字をめぐる言語にあつて、しばしば同じく「音節文字」と括られてしまふ、仮名と(調民正音)の決定的な違いはどこかそこらで、この点を重要である。仮名は一文字が一音節を表すが、その音節の内部構造は見えない。一か一つの外部境界は見えない。一か二か三か、などといったことは、一か」といふ仮名からは見えないのである。一か二か三かの間が音節の境界であることが判る。読み手に音節境界が見えることとして初めて、「一か二か」と「二か三か」などが発音されるのではなく、/kai/と発音されること判る。文字の平面において、音節境界が見えるからか、は、音の平面において、さうした重要な差をもたらすのである。

上には片輪も見えない。言語は異なるが、例えば英語の /p/、/b/、/pʰ/、/bʰ/ の発音を例にとつても、/p/ から舌を動かさず、/pʰ/ までつまのりとひこを下げて、/b/ で鼻を抜くだけで済む。なるほど /p/ と /b/ の舌の位置と形は同じである。さらにこの有気音「激音」を「激音」を「激音」に画を加え、/p/ と /b/ となる、等々。正音はこれで満足しなかつた。さらに、音の高低までも形にしたのである。これが高く発音する音節であれば(傍点)一点を左に付、/p̄/ のごとく表した。無点であれば低、一点は高い、二点は低から高、何故にこの(傍点)と呼ばれる表記を用いて、音の高低についてまで表記するシステムを造り上げたか。著者が「高低低、」(傍点)と「高低高、」(傍点)のごとく、現代の日本語東京方言が音の高低によって単語の意味を区別しているように、一五世紀朝鮮語も音の高低によって単語の意味を区別していたからに他ならない。こうしたシステムを「高低アクセント (pitch accent) と言つて、おおよそ「派生された」とは、必ずから音の高低のバターンは特定の原則

は、/p/、/b/ の字母に加算することによって創る。/p/ が /pʰ/ となる。これも小さな驚きである。/p/ と /pʰ/ が発音器官のほぼ同じ場所(調音点)で作られる音で、あることが、文字の形の上に反映されている。ラテン文字を見ても、ギリシア文字を見ても、もちろん「た」など仮名を見ても、音が作られるありようなど、文字の

『言語存在論』



事項索引

数字アルファベット  
P1984 318  
21世紀世宗計画 286  
A1の意味 219  
be 動詞 353, 355  
C言語 211  
DNA 194-195, 註 74  
Eメール 211, 215  
Facebook 206, 209  
Gestalt 註 32  
Google 204-205  
IC 註 31  
IT革命 17, 184, 188  
Longman Dictionary of Contemporary English 註 101  
Lost Paradise, A 註 114  
Microsoft 204  
Nootoka 語 282  
SON言語 215  
TAVNet 205, 213  
TAVNet資本 205-206, 216, 218-219  
turn 174-176, 228, 287, 註 64, 註 70, 註 85  
turn は重なり得る 註 85  
turn 誘発機能 190, 註 70  
turn 切斷子 註 70, 註 98  
Twitter 206

アナログ・テキスト 197, 203-205  
アナロジー 9  
アグダグ 語 59  
アグヤド 註 59  
アマノ 333  
網と雲 218  
アメリカ構造言語学 52, 註 135  
語り 314  
予め用蓋されたテキスト 209  
新たな語彙 184, 189  
アラビア 88  
アラビア数字 162, 256  
アラビア文字 124, 140-141, 註 59  
形状(ありかた)ノ詞(ことば) 註 139  
ありよう(を示す) 1, 355  
アルバイ語 185  
アルファベット 74-75, 90, 145-146, 148, 151-155, 157, 159-162, 註 59  
アルファベット 361  
[アルプスの少女] 284  
アンジェスマン 72, 註 34  
暗示の意味 115  
アンソドロイドは電気羊の夢を「見るか」 318  
暗黙知 55, 註 28  
いいね! 209  
言い間違い 313, 註 158  
威嚇 270  
いかに在るか ii, 6, 111, 363, 367  
いかに存在するか i  
意義 註 124  
意義論 247, 248  
生きている言語 50  
伊語→イタリア語  
意識 vi, 5, 364  
いじめ 212  
位相的な意味 vi, 註 108  
位相的に異なる: (話されたことば)と(書かれたことば)が 註 85  
位相の異なる鏡像関係 122  
イタリア語/伊語 63, 79  
イタリア語派 353  
一音節語 149  
一語文 235-236, 274, 283, 344  
二点 62  
一人称 註 122  
一人称の人物 291  
一文を起した文法記述 註 110  
一回的 200  
一種の機械 362-363  
一般 248, 258  
一般言語学 i, 355  
[一般言語学講義] 11, 119, 350, 註 28  
一般人 247-248  
一般の意味 249  
一般文法 註 140  
一般名辞 註 149  
イデオロギ 208  
イデオロギ-操作 206  
意圖 252, 270, 298-300  
移動 211  
異文化 106  
異分析 142, 314  
いま-ここ 112, 126-127, 130, 132, 209, 315, 319, 321-322  
いま-ここに-新たに-実現する意味 374  
未だ語まででない今 127  
意味 vi, 23, 25, 95, 100, 148, 153-160, 163-164, 210, 212, 244, 248, 296, 311, 336, 337, 359-360, 364, 367, 370, 374-375, 註 124, 註 158  
意味(発話者と受話者の) 112-113  
意味が実現しない 309  
意味が実現する 102-103  
意味から自由になる 111  
意味作用 9  
意味されるもの 36, 117-118  
意味するもの 36, 117-118  
意味づけ論 註 42  
意味的な非文 304, 310  
意味と意義 365  
意味同一性 359-360  
意味同一性の神話界 119  
意味と機能 219  
意味として実現しない 97-98